

## 受賞者の業績



あべあいこ氏 53歳(保健婦・岩手県)

昭和33年紫波町役場に保健婦として着任。当時交通不便な山間地を担当、徒歩、自転車による家庭訪問活動を昼夜をわかつたず精力的に行う。全国平均値を大幅に上回っていた乳児死亡率の低下を目指し、一貫した乳児死亡半減運動を推進、赤ちゃんコンクールなどを活用し、これを実現した。また、保健研究会、生涯教育連絡会議との連携強化を図り、生涯教育の充実にも力を注いでいる。



たなかみちこ氏 55歳(保健婦・群馬県)

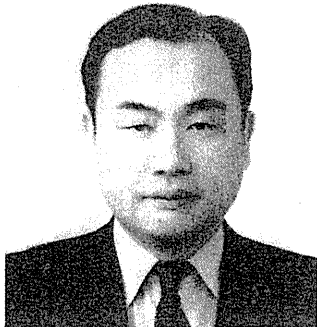
農繁期には農薬散布や多くのかがみ仕事等、劣悪な環境にあった吾妻地区において、泊まり込みで健康診断、保健指導等を行い、明るい町村づくりを目指して母子保健事業を推進し、愛育班の結成、育成に尽力。その後母子保健事業の積極的な見直しを行い、今日では他機関、多職種と連合を図りつつ、乳幼児健全育成事業の推進、母子保健の一貫した管理化実現のための努力を続けている。



かとうまちこ氏 48歳(保健婦・千葉県)

松戸市が東京のベッドタウンとして急速な若年世代の流入による人口増加、核家族化、出生数の増加状況にあった昭和47年に着任。以来、乳児死亡率ゼロを目標に心身障害の発生防止と早期発見、未熟児管理を中心とした乳児死亡激減対策、市民健康相談室の設置などに取り組む。その結果、乳児死亡、周産期死亡は激減し、母子保健の向上に大きく貢献した功績は高く評価されている。

はる き えい いち  
春 木 英 一氏 48歳(小児科医師・神奈川県)



昭和49年神奈川県リハビリテーション病院着任以来、かねて研究中の先天性代謝異常症のマス・スクリーニング検査にガスリー法を導入し、早期発見、早期治療体制を実現。いわゆる神奈川方式のシステム化に貢献した。その後、コンピューターの導入によるスクリーニングから検査データの管理・保存までの一貫したシステムを完成させるなど、先進的な研究とその実際的な活用は、常に注目を集めている。

くぼた とも こ  
久保田 友 子氏 44歳(保健婦・山梨県)



甲府市に隣接する竜王町で地道な努力と温厚な人柄をもって、母子を中心とした保健活動の担い手として19年間にわたって活躍。「成人病予防は、幼いころの食習慣が大切」との観点からの母と子の栄養教室等を開催し、町民一体となった保健活動を促した。妊産婦から乳幼児までの一貫した母子健康カードを作成し、すべての母子が健康で過ごせるよう種々の活動を実践している。

おの みえこ  
小 野 美枝子氏 48歳(准看護婦・岐阜県)



養老町役場着任以来、常に地域住民の生活に根ざしたきめ細かな保健活動を行い、健全なる環境づくりに寄与してきた。年6回の母親学級をはじめ、はみがき教室、離乳食学級開設等に、特に力を注ぎ、保健活動推進の拠点ともいえる保健センターの開設にも尽力した。また、地区組織の必要性を痛感し、日夜奔走の結果、母子保健推進員設置に至り、今日では15名が活躍している。

たけ うち たみ こ  
竹 内 民 子氏 44歳(保健婦・愛知県)



美浜保健所管内で、母子の健康管理の充実を図るため、乳幼児健康診査全体をシステム化し、特に母乳哺育の推進を足がかりに効率的な健康診査に取り組んだ。また、次代を担う若者の健全育成を目的として母子健全育成健康教室を開催。保育所・学校等関係機関との連携を図り、積極的に講演会等を開催するなど、地域に根ざした母子保健のネットワークづくりを目指して努力を続けている。



たけ みね ひさ お  
竹 峰 久 雄氏 53歳(小児科医師・兵庫県)

昭和45年、県立こども病院開設に準備段階より参画。49年には未熟児医療の実態調査をし、未熟児センターの適正配置をいち早く提言。その後、重症ハイリスク新生児の出産に小児科医が立ち会い、適切な処置をして搬送する新生児搬送システムを確立するなど、県内の未熟児医療の体制づくりの中心となって活躍を続けている。現在は周産期医療センター開設に向け努力している。



いけ だ たか こ  
池 田 孝 子氏 52歳(保健婦・島根県)

昭和47年当時、松江市は死産率が著しく高かったため、妊婦の健康保持を図ることを目的に母親教室を開設。時代に合わせて内容を充実させて現在も継続中で、死産率は大幅に改善されている。また育児の不安をもつ若い母親を対象に、母子保健推進員の協力を得て、乳幼児教室を開催するなど地域に根ざした活動を積極的に展開し、よりよい活動体制づくりに努力している。



つか もと ひろ こ  
塚 本 弘 子氏 53歳(保健婦・岡山県)

非衛生的な生活習慣が残り、医療機関にも恵まれず多産多死の状況にあった担当地域で、妊産婦学級や夜間の訪問指導を実施し、健全母性づくりの体制を築くため献身的に活動してきた。また、未熟児出産、妊産婦貧血対策にも力を注ぎ、地域の保健活動の基盤である愛育委員の指導に早くから着手し、今日では勤労妊婦のため、夫、姑とともに参加する日曜・愛育大学を開催している。



たか き とく こ  
高 木 徳 子氏 54歳(保健婦・香川県)

着任当時、人口妊娠中絶の増加、流産の多発、乳児の栄養不足等の問題を抱えていた山本町にあって、母親学級、家庭看護教室等の開催、家庭訪問や衛生教育を積極的に実施した結果、昭和62年には乳児死亡ゼロを実現。早くから地域組織の必要性を痛感し、愛育会結成にも尽力した。常に町民の身近な相談相手となり、健康保持、増進に関与し、その功績は住民から高く評価されている。

やま ぐち  
山 口 ユキ子氏 42歳(保健婦・長崎県)



長与町は長崎市のベッドタウン化に伴い、若年層の転入が増加し、母子保健活動の要求が高まりつつあった昭和40年代後半より、地域に即した活動を推進し、母子管理体系を確立した。特に49年、閉居しがちな心身障害児母子が悩みを出しあう場として「ひばり学級」を開設し、保母、小児科医、精神科医、歯科医等の協力を得て、長期フォローのための大きな受け皿として機能させている。

たか き みほこ  
高 木 美穂子氏 47歳(保健婦・助産婦・熊本県)



清和村はいわゆる無医村で、氏が昭和48年に着任するまでの8年間、保健婦不在が続いていた。当時13%にも及ぶ未熟児出生率対策として、女性セミナーを開催、妊娠、出産に関する知識の普及に努め、また、全戸訪問、健診後の徹底した指導を行い、著しく低下させることに成功した。現在は祖父母対象の育児学級開催、有線放送による健診案内等、積極的な住民の健康管理を推進している。

くし さき とし え  
串 崎 俊 枝氏 53歳(保健婦・下関市)



昭和34年の着任当時、外国人居住地を含む劣性の保健環境の地区を担当、昼夜を問わず訪問指導を強化し、地域環境の改善に努めてきた。九大小児科の協力による「3歳児精密健診の実施は、全国に先駆けて難聴学級「きこえの教室」創設の契機となった。また、従来の母子管理体制の見直しを行い、「下関市母子管理票」を策定するなど常に積極的な活動を実践している。

と 肥 こし こ  
上 肥 佳 子氏 54歳(保健婦・福岡市)



昭和30年代の前半は結核の家族内感染による乳幼児の発病が多く、早期発見、治療を勧奨するための家庭訪問指導を徹底して行ったほか、核家族化による不安解消のための妊婦教室、電話、面接による相談等を通して、30年余に及ぶ母子を中心とする保健活動を実践。近年は、精神発達のおくれのある幼児と母親を対象とした「つくしんぼ学級」や女子高生を対象とした禁煙教室にも力を注いでいる。